教育ママと圧力

柳平： いま、日本では“教育ママ”ということが言われています。子供に無理に教育をするという傾向があります。しかし、一方では、幼児にあまり早く言葉を教えては、かえって、人間性に何か悪い影響があるのではないかとも言われています。これについて、おうかがいしたいのですが。

ドーマン： アメリカでは、教育ママのことを“圧力”と言っています。子供に圧力をかけるという意味です。

教育されるということは、しばしば、苦痛を伴いますが、習うということは、最上の喜びでもあります。すべての子供は食べることよりも習うことの方が好きだと思います。「習いなさい」「習いなさい」と言って圧力をかけるよりも、子供が自分で習いたいと思っていることを妨げることのほうが、ずっと馬鹿げていると言えます。

赤ちゃんは、とくにそうです。習うことのほかに好きなことというのは、世の中にないと思います。

子供は、習うことが好きなのです。けれども、結果を試されるのは嫌いです。皆様だって習うことはお好きでしょう。でも、それを試されるのは、いやでしょう。

「いま、私が申しあげたことについて、試験をしましょう」と言ったら、皆様は、ここで緊張されるに違いありません。子供にものを習わせるということで、圧力を加えるくらいバカバカしいことはないわけです。圧力を加えるということが、本当に子供に害を加えているのだと考えていらっしゃらないからです。

私の事務所に、お母さんが、赤ちゃんを連れて入ってきます。帰るとき、お母さんは赤ちゃんに「“さようなら”とおっしゃい」と言います。でも、赤ちゃんは私に“さようなら”と言った例がありません。お母さんは、さらに、「先生に“さようなら”とおっしゃい」と言います。それでも、赤ちゃんは、何も言いません。

今度は、お母さんの方が、緊張してしまうわけです。私の方も、これで緊張してしまいます。だけど、赤ちゃんは、一向にそんなことは、意に介しません。赤ちゃんの注意は、全く他の方へ向いているのです。お母さんは、冷汗をかきますが、赤ちゃんは、そんなことに全く構いません。

というわけで、私は、圧力をかけるということは、好きではありません。また、これで効果のあったためしもありません。